

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第883号 平成27年2月19日

アンプティサッカー

平成26年11月28日付日本経済新聞文化欄の記事を読んで、「アンプティサッカー（杖サッカー）」の存在を初めて知りました。

この記事を書かれたのは、元アンプティサッカーブラジル代表の日系3世エンヒーキ・松茂良・ジアスさんで、彼は現在、「アンプティサッカー」の日本代表として活躍しています。

「アンプティサッカー」の「アンプティ」というのは「手や足を失った人」の事を意味する言葉で、事故や戦争等で片腕や片足を失った人がクラッチという杖を使いながら参加するサッカーの事を「アンプティサッカー」といいます。またこのサッカーは7人制の競技で、ゴールキーパーは腕の無い人がプレーします。

「アンプティサッカー」は、1980年にアメリカで始まったとされていますが、足に障がいのある人々にとっては気楽に楽しめるスポーツとして海外では急速に普及しており、

2014年にはメキシコで第10回のワールドカップが開催されるまでになっています。

日本に「アンプティサッカー」持ち込まれたのは、日本経済新聞の文化欄にこのサッカーの紹介記事を書かれたエンヒーキ・松茂良・ジアスさんが2010年来日した事がきっかけだったそうで、産声を上げたばかりといっても良いでしょう。それでも、2010年以降開催されている3度のワールドカップに日本代表チームが参加しています。

国内での「アンプティサッカー」人口は増えつつあるようですが、知名度の方はまだまだ低いのが実態で、私も、恥ずかしながら日本経済新聞の記事を読んで初めてその存在を知ったところです。

身体に障がいがあっても、社会の中で人と関わり、また、積極的にスポーツに親しんでいる人は沢山いらっしゃいます。私は、そうした障がい者の方々の姿に触れる度に、「自分ももっとシャンとしなきゃだめだ」と反省させられます。特に、最近では車いすマラソンや車いすバスケット等のように競技性の高いスポーツも沢山あり、パラリンピックでは、一人ひとりの選手達の運動能力や技術の高さに驚かされ、感動した事を覚えています。

札幌市内では、前田和哉さん（28歳）が道内で初めて「アシルスフィーダ北海道」というチームを立ち上げ、「アンプティサッカー」の普及に熱心に取り組んでいます（1月7日付北海道新聞から）。

前田さんは、6年前に事故で右腕を失っています。彼は、突然の悲劇に見舞われ「先が見えない気持ちになった」そうですが、東京でのリハビリ中に自分より障がいの重い人達が元気に動き回っている「アンプティサッカー」と出会い、大いに触発されたのだそうです。

チーム名にある「アシルスフィーダ」というのは、アイヌ語とイタリア語を組み合わせた「新しい挑戦」を意味する造語だそうです。それは、右腕を失った痛手を跳ね返して生きて行こうとする前田さんの気持ちそのものといって良いでしょう。

「アンプティサッカー」は、日本国内ではまだまだマイナーな存在ですが、国際パラリンピック委員会（IPC）は、2020年の東京パラリンピックゲームの新種目競技の候補として選出した事を発表していますので、今後、競技人口は急速に増えるのではないのでしょうか。

前田さんが立ち上げたチームは、今のところチームメートが9人ということですから、試合形式での練習は難しそうですが、将来は全日本で優勝を狙えるようなチームに成長するよう、「アシルスフィーダ（挑戦）」し続けて欲しいと思います。

（塾頭：吉田 洋一）